

古典学習受容の実態

——『徒然草』教材の場合——

住 原 久美子

一 はじめに

教職に就いてはぼ一年を経ようとする今、学習者の古典教材享受の実態をとらえ学習指導のあり方をみつめ直す機会が与えられたことを幸いに、小稿としてまとめたいと思う。

古典学習指導においては、言語技能面の指導にとどまらず、それから古典学習における障害を越えて、古典作品を文学として味わっていく姿勢づくりの徹底を図り、古典を読む力というものを「ことば」の学習との関連の中でおさえていきたいというのが、私の念願であった。

こうした願いに基づく実践がどこまで学習者に浸透したかについては大きな疑問が残るが、今回は特に『徒然草』教材を取り上げて、学習者＝現代高校生がこの作品をどのようにとらえ受けとめているのかという享受実態を明らかにし、合わせてその学習指導の意義・価値についても考えてみたいと思う。

二 学習指導の概要

(1)教材について

『徒然草』の学習指導の際扱った章段は、教科書（角川書店発行

古文（）に採録された、序・一五・三二・六〇・七四・九二・一一七・一三七・一四二・二二五の計十章段である。これは、全章段の内容分類に基づいてテーマ別に平均的に取り上げたものを序列化した教材化になっている。

(2)指導目標

。兼好の透徹したものの見方・論理的思考・鋭く的確なものとのらえ方をつかませ、自己のものの見方・考え方・感じ方・とらえ方を深め、高めさせる。

。兼好の鋭い人間観察・人生認識について学び、更に自己の人間観・人生観と対決させた上で人間性・生き方・人生の問題についての洞察を深めていかせる。

。中世の人間達の生き方・考え方を明らかにし、時代・社会への洞察を深め、その特質や現代との繋がりについて考えさせ、更に歴史の流れの中で人間がどのように新しい方向性を見つけて出して現代に至っているか探る目をもたせる。

。表現の彫琢や種々の文体の創造性・効果性や思惟の蓄積性を実感として受けとめさせ、自己の言語感覚を磨かせ表現の能力や方法を訓練させる。

(3)指導対象・時期・時間数

第一学年 二クラス 二学期～三学期（十一月中旬～一月下旬）
十六時間。

⑨教科書採録章段の学習指導の他に、昌文社発行の『徒然草』問題集をテキストとして、夏期休暇中の補習授業及び第二・三期の補習授業（いずれも全頁必修）で各数章段の指導を行ない、夏期休暇中及び冬期休暇中の宿題として各十章段の家庭学習をさせた。

三 学習者の享受の実態

(1) 調査対象

第一学年五クラス二二二名（男子一〇〇名、女子一二二名）

直接指導に当たったのは二クラスであるが、第一学年全体を調査対象とした。各章段の扱い方・進度等については、残り三クラスの指導者と若干の異なりがある。

(2) 調査方法

『徒然草』教材学習後の二月上旬に、西洋紙二枚分に十二項目についてのアンケート調査を行ない、読後感想文（八百字以上）を提出させた。いずれも家庭作業とした。

(3) 「アンケート調査」の内容及び結果

提出者 二〇九名（男子八八名、女子一二二名）

① 興味・関心について

a	大変興味があった	11	13	24
b	興味はあった	47	81	128
c	あまり興味はなかった	26	26	52
d	全く興味はなかった	4	1	5
		4	1	5

。興味・関心のあった理由

- ・ 有名な随筆で兼好やその思想に関心があった。
- ・ 現代にも通じる考え方に示唆を受け、内容に興味があった。

。興味・関心のなかった理由

- ・ 内容理解に時間がかかる。
- ・ 興味のもてる段が少ない。

② 難易について

a	大変難しかった	6	5	11
b	難しかった	38	59	97
c	まあまあであった	41	54	95
d	難しくなかった	3	3	6
		3	3	6

難しかったとする者とまあまあであったとする者は、男女共にほぼ同率である。

。難しかった理由

- ・ 表現の裏に込められた著者の真意を探ることが困難だった。
- ・ 助詞・助動詞を中心にした文法が難しかった。

女子の興味・関心が男子を上回っているが、全体の七三%の者が興味・関心があったとしている。その理由として多く挙げているものを次に記してみる。
(以下同様)

e	d	c	b	a	
徒 然 草	伊 勢 物 語	古 今 和 歌 集	平 家 物 語	今 昔 物 語 集	男女計順位
361	283	220	178	278	
475	453	322	217	333	
836	736	542	395	611	
①	②	④	⑤	③	

・兼好の思想をもっと掘り下げたり、いろいろな面を知ったりした。
 ・共鳴する点が多かったのでもっとプラスになることを見つけた。
 ・読んでみたくない理由
 ・意味をつかむのが難しく時間がかかる。
 ・同じような内容で批評が多くおもしろくない。
 ⑦ これまで学習した古典作品のうち、印象的であった作品（興味深かったもの・心ひかれたもの）の順位
 ⑧ a～e の作品順に学習指導を行なった。b の『平家物語』は一学期後半に二教材を扱い、残りの二教材を『徒然草』教材及び俳句教材の学習後（三月）に扱った。
 印象に残っている順に番号をつけさせ、最も印象的であった作品を五点とし、以下四点、三点…として換算した合計を示した。

五作品の中で、『徒然草』が最も学習者の心に触れたものであることがわかる。

e	d	c	b	a	
<ul style="list-style-type: none"> 身近な題材を扱い、著者の考えをはつきり表わしている。 著者の言いたいことが実感として受けとめられ、思わず自分自身のことを考えさせられた。 	<ul style="list-style-type: none"> 内容が一番よく理解でき、人々の心の動きに感動した。 男女の愛の種々層に興味があった。 織り込まれた歌が効果的で、しみじみとした趣深い内容だった。 	<ul style="list-style-type: none"> ことばの響きが美しくしみじみと心に伝わってくるものがある。 	<ul style="list-style-type: none"> 歴史的な展開や当時の武士たちの生き方に心ひかれる。 作品自体に何か重みがあるような気がし、人々の哀しさ、優しさなどに深く感動した。 	<ul style="list-style-type: none"> 内容が理解しやすくおもしろい。 内容が理解しやすくおもしろい。 	<ul style="list-style-type: none"> 最も印象に残っている作品として選んだ理由（抜粋） 最も印象に残っていない作品として選んだ理由（抜粋）
	<ul style="list-style-type: none"> 興味をひくものがなく、得るものも少なかった。 恋の話が多くおもしろくない。 	<ul style="list-style-type: none"> 作者の真意を読み取るのが難しい。 和歌とは多少なじみにくい感じがする。 	<ul style="list-style-type: none"> 敬語使用が多く内容理解にまどった。 二つの教材しか取り上げなかったため印象が薄い。 軍記物語は現代に生きる私たちにとって親しみにくい。 	<ul style="list-style-type: none"> 話が単純で表面的なおもしろさに終わっている。 	

以上のように、学習者は、作品に蔵された普遍的人間性や日本人の個性、或はそれぞれの時代をみつめて生きること真剣に取り組む姿勢の見られるものや、言語表現の優れた効果性があるものに興味を示しているようである。特に、『徒然草』を興味ある作品とし

て選んだ理由をみると、論理性・思想性を備え、直接自分達の生活に関わりをもち、魂に響いてくる内容をもつものや、時代の隔たりを越えて著者との対話ができるものを求めていることがうかがい知れる。

⑧教科書に採録された『徒然草』十章段のうち、より印象に残っているものの順位

⑨印象に残っている順に番号をつけさせ、最も印象的であった章段を十点とし、以下九点、八点……として換算した合計を示した。

〔表1〕

215段	142段	137段	117段	92段	74段	60段	32段	15段	序段	男
平宣時朝臣	心なしと見ゆる者も	花は盛りに	友とするに悪き者	ある人、弓射ることを習ふに	蝶のごとくに集まり	て真乘院に成親僧都と	九月二十日のころ	ばいづくにもあれし旅立ちたるこそ	つれづれなるままに	500
349	447	374	584	570	629	564	413	355	500	⑤
⑩	⑥	⑧	②	③	①	④	⑦	⑨	⑤	女
508	705	631	743	775	714	770	633	442	624	⑥
⑨	⑤	⑦	③	①	④	②	⑥	⑩	⑥	計
857	1152	1005	1327	1345	1343	1334	1046	797	1124	⑩
⑨	⑤	⑧	④	①	②	③	⑦	⑩	⑥	⑥

男女の別によって多少の差が見られはするものの、高得点を占める章段は、九二・七四・六〇・一七段と共通している。

今後、章段選択や章段編成のあり方について考えていく上での一助としたい。

〔表2〕

117	92	74	60	32	15	序	段
的好の人間性をより印象	兼好独特の考えに基づ	今も昔も変わらない人間性の弱点を鋭くつ	現代にそのまま通じる思想内容に共鳴し、人間生命や生きざせられたい。深く考えさせられる。	強や個性的自由な生き方	優しくしつとりした少女の人の心づかいかれた	日頃気づかない細かい点を詳しく観察している	特に心に残っている章段と、その理由
22	13	18	24	6	1	11	男女計
18	24	20	35	10	3	16	男女計
40	37	38	59	16	4	27	男女計
と矛盾感覚が多い	自分の友人論と異なる	表現が難解で内容が理解しにくい	批判するのには許せない	僧都の人間性がまだよ	現代の女性論と異なり	一人旅をしたことがない	興味のもてなかつた章段と、その理由
8	1	3	3	9	13	11	男女計
11	3	15	12	8	20	14	男女計
19	4	18	15	17	33	25	男女計

	215	142	137
兼好独自の物の見方・ とらえ方に深く共鳴し た。			
兼好の庶民に対する見 方や社会批判に同意で きる。			
主人公の人間性や質素 で暖かい雰囲気にか かれた。当時の人の生き 様に感銘を受けた。			
	2	7	5
	6	16	11
	8	23	16
兼好自身の感想が加え られていないため何が 言いたいのかわかりな い。感じが好まれない 物足りない。			
	14	7	22
	18	6	18
	32	13	40

以上のように、七四・九二段を多くの者が選んでいるが、これは
学習者自身と密接な関わりをもつ問題を含んでいるためであろう。
また、六〇段を選んでいるのは、勿論内容のおもしろい点も挙げら
れようが、むしろ無欲で創造力豊かで自由奔放に生きている僧都に
憧れをいだき、不可能とわかっていながらもかくありたいという願
望を各自がもっているためと思われる。一一七段を選んでいるの
は、簡潔で理解しやすい内容をもつ点が見逃せないが、各自の考え
る友人論と照らし合わせた上での興味を示している。そして、より
確かな兼好の人間像を求めようとする姿勢がうかがわれる。

〔表3〕教科書採録章段以外で興味のある章段

人数	段								
15	109								
13	30								
11	194								
7	68								
5	42								
4	188	44	54						
	209	7	12	45					
3	49	71	236						
	87	3	18	19	20	31	75	85	
	89	121	122	232	235	238			
2	190	110	135	140	141	143	145	155	167
	241	10	21	35	41	51	52	53	55
1		170							

補習や家庭学習においては内容理解に力点が置かれて、鑑賞にま
で深めることが困難であり、また各人の読み取りに深淺の別がある

ため、確かな結論を引き出すことは難しいが、学習者が選出した
章段及びその選択理由をみると、いずれも、

- ・内容のおもしろさ
 - ・兼好の思想・精神の深さ・豊かさ
 - ・人間・人生について考える上での示唆
- を含みもった章段にひかれていることがわかる。

⑨ 『徒然草』を学習して一番強く感じたこと

・兼好について

- ・今の時代・人間にもそのままあてはまることを何百年も前に書
いた偉大さ

- ・知識の広さや豊かな人間性
- ・ものの見方・考え方の独自性

・作品について

- ・いろいろな立場や角度から見ても、種々のことを思うままに記し
ている。
- ・現代にも十分通用する教えのようなのが記されている。

・文章表現について

- ・表現方法・表現力の豊かさ
- ・説得力のある文体
- ・作品から学んだものについて
- ・人間の営みのはかなさ
- ・本来の人間の姿
- ・いかに生きるべきか

・昔の人のものの考え方、生活様式

⑩ 『徒然草』作品の中で特に心に残った言葉

段	心に残った言葉	全文	序	男女計
15	いづくにもあれ、しばし旅立ちたるこそ、めさむる心ちすれ。		1	15
32	やがてかけこもらましかば、くちをしからまし。ただ朝夕の心づかひによるべし。		3	8
44	心のままに茂れる秋の野らは……遣水の音のどやかなり		0	1
51	万にその道を知れる者は、やんごとなきものなり。		0	1
60	ただ一人のみぞ食ひける。他		3	0
74	蟻のごとく集まりて、東西に急ぎ、南北に走る。期するところ、ただ老いと死とにあり。他		20	25
91	吉凶は人によりて、日によらず。		0	1
92	初心の人、二つの矢を持つことなけれ、なんぞただ今の一念において……はなはだ難き。他		22	34
93	一日の命、万金よりも重し。		0	1
117	よき友三つあり。一つには物くるる友、二つには医師。三つには知恵ある友。		4	3
127	あらためて益なき事は、あらためぬをよしとするなり。		2	2
137	よろづのことも、初め終はりこそをかしけれ。他		2	8
140	身死して財残る事は、知者のせざるところなり。		0	2
142	心なしと見ゆる者もよき一言言ふものなり。恒の産なきときは恒の心なし。他		9	19
155	沖の干涸遙かなれども、磯より潮の満つるが如し。		1	0
188	一時の懈怠、即ち一生の懈怠となる。		2	4
			1	6

兼好自身の教え・戒めが表わされた文
 真理を言い当てるもの、また表現が巧みで口調の良い文などを多く挙げている。
 序・七
 四・九二
 一・四二
 段の中から指摘している者が群を抜いて多いことが注目される。

235 虚空よく物を容る。心に主あらましかば胸のうちにそこばくのは入りきたらざらまし。
 ①『徒然草』学習上、もっと掘り下げて考えてみたかった点
 1
2
3

兼好の人間像(性格・生涯・生活環境・他の作品など)	人数
仏教的無常観	31
兼好の思想・精神	14
時代背景・社会事情・生活様式	7
何故「徒然草」を書いたのか	7
人間の生き方	5
現代人の思想との相違について	5
内容の掘り下げ	3
当時の人々(兼好以外)の思想	3
抜粋部分以外の内容	2
鎌倉時代の宗教の性格	2
	1

ここでもやはり学習者が、著者・兼好をさまざまな角度から知りたいと願い、更に、彼の思想をより深く探り、自分達のそれと対応させて考えてみたいと願っていることがわかる。また、中世に生きた人間一般についても、より深く知りたいという欲求を持っていることがうかがわれる。

(4)「感想文」の分析・考察
 統いて、提出させた一九八(男子八一・女子一一七)編の読後感想文を分析・考察することによって、『徒然草』教材に接した学習者が感じ取っているものを探ってみた。
 感想文の内容に即して大まかに分類すると、

。ある特定の章段を選んで、表現された兼好の思想・精神・生き方などについて、或は描出された人間・社会・時代性などについて、或は同様な体験・見聞について綴ったもの（八六編）

序段…2 15段…1 30段…2 52段…1 60段…16

74段…10 92段…15 117段…5 137段…8 42段…9

194段…1 215段…1 複数段…15

。全章段を通して、兼好の人間像、その思想・精神について、或は各自が考え及んだ人間観・人生観について、或は文章表現について綴ったもの（一一二編）

・兼好に焦点を当てたもの………70

・作品論に力点が置かれたもの……42

となる。

以下、紙面の都合もあるので、その概観を記していくことにする。

まず、各章段に即して感想を綴ったものをみると、単に章段内容の枠内にとどまらず、自身の問題としてとらえ直し、発展的に考えを記したものが多く、例えば、第七四段に因して、「ズバリ自分が兼好の描いた醜い人間の姿に該当するためより響くものがある。ここで兼好が言っていることは、いつの時代になっても忘れてはならない生きる上での心構えとして持つべき大切なことだと思う。」（女）「私たちが今、それ（変化の理）を自覚したところで一体何になるのだろうか。この世は確かに無常である。しかし、私たち若い者にはその言葉はまだ必要なのではないだろうか。（中略）私はこれから最後に待っている。死よりもその前にあるはずの。何か。

に向かつて必死に生きてゆきたいと思う。」（女）と記したのもや、現代社会の情勢批判に続いて、「六百年以上前も現代も人々は同じである。私腹を肥やすために人々をだまし、更には祖国までも裏切る。物質的には発達したが精神的には全然進歩していない。無常ではなくて無情だ。」（男）と記し、兼好の生きた退廃と窮乏の乱世と、社会的道義の退廃や物質文明の偏重を含みもつ現代との繋がりを感じとり、心に触れたものを語っているものがある。

また、第一三七段については、情趣的な内容をもつものだけに現代高校生には敬遠されがちだろうと考えていたが、意外にも強い関心を示す者が多かった。共鳴・反感の別はあるにせよ、兼好のものの見方・とらえ方について考えさせられたようである。例えば、「私が一番好きでないのはこの段でした。別に兼好が書いた文章が悪いのではなく、あまりにも私のいなか者くさを指摘されたのがくやしかったからです。雪がふれば一番に足跡をつけたがる。桜が咲けば一枝折って帰る。まさに自分の姿でした。」（女）という意見もあれば、「自然物に対する思想について共鳴し、強く心をひかれた。こういった兼好の人並みはずれた自然観にほくは感動を覚える。」（男）「自然物に限らずあらゆるものの見方を兼好が教えてくれた。美とはこれだ、この時が一番美しい、とは全く言えないと思う。生きていくすべての物について、その一瞬一瞬に精一杯生きている姿が美しいのだと思った。その美を壊しがちに私達はなっていないか？鑑賞の態度にも大いに反省すべき点があると思っただ。」（女）という意見もある。「物の生命がはかないものであるからこそ完全な美しさよりも不完全な美しさの方に、本来の美とい

うものがあることを強調している。「(女)ととらえ、無常観が底流をなしていることに思い至っている者もいる。

続いて、全章段を通して兼好に焦点を当てて感想を綴ったものを紹介する。彼の人間性・思想を肯定・礼讃する者と否定・批判する者の二者に大きく分かれるが、前者は、その観察の的確さ、感じ方・考え方の深さ・鋭さ・新鮮さ・力強さ・情味といったものと同時に、素材の豊かさ、ユーモアの本質、表現の簡潔美、描写の鮮やかさなどを指摘し、それらへの共感を語っている。一方、後者には、兼好のものの見方・考え方に付着している理屈っぽさ・偏見を指摘し、自己告白性の稀薄さ・傍観者的姿勢に対して不満を示し、無常観や閑居求道への志向を一種の社会的現実からの逃避と見て、自分達には無用のものとしている者が少なくない。こうした指摘からは、逆に、学習者が今の自分達の立場で『徒然草』を読み、自分達の生活感覚に対比させて受けとめているということが導き出せるのであるが、以下主だった意見を挙げてみることにしたい。

「ある意味で人間の良き理解者であると思う。いかに兼好が人間というものを深くみつめているかということがわかる。兼好は人間のたわいもない動作ひとつにも関心を持ち、広い視野でそれを観察し、何にとらわれるということもなく自分のほいままに表現している。」(女)「下級貴族の家に生まれた兼好にとって世俗での出世には限界があった。しかし、出家することによっていろいろな社会的身分の制約から解放され、多くの貴族とつきあえるようになった。兼好の考え方は、そんな人々とのつきあひの中でいろいろな人間の側面を見ることによって確立していったものだと思う。」(男)

といった意見や、更に想像をふくらませて、「兼好は孤独で寂しかったのかもれません。無常観にたえきれず、少しの間にも自分の物を残したくて随筆を書いたのかもかもしれません。しかし、鎌倉期に生きた一人の人間として、人間味あふれる人として、親しみを感じました。」(男)「兼好が作品に記した仏教的な悟りの言葉は、他ならぬ自分自身に言いかけせようとしたものではなかったのだろうか。人間の愛情を仏教的な立場から否定はしているものの、この人はだれよりも人間の愛情というものを求めていたのではないのだろうか。」(女)など記したものがあつた。

これらに対して、「自分は絶対に正しいと思っているように思えるところや、趣味のおしつけのように思えるところも好きではありません。」(女)「あまりの人間理解の完璧さによって何となく説教じみた感じがする。」(女)「直接政治にかかわってはいない。直接生活にかかわってはいない。これが欠点である。(中略)あくまでも第三者という立場からの発言である。それだからこそ冷静にあのようなが書けるのだと思う。」(男)という批判的意見も多いのであるが、この点については、次のような擁護の意見もみられる。

「むしろ自分自身でそれを実行しているわけではないし、世の中の動きをみてもそれは理想論に終わっている。けれど私はそれでいいと思う。兼好は文学者として文章で世の中に訴えたのだから立派だと思つた。」(女)「人間どうし闘争心を持つたらいがみあつたりして、普通の人は主体性を失って操られてしまっているような気がする。だから、一段上の離れた立場で社会や人間を見透し、物事の本質を理解できるということは貴重な能力だと思う。」(女)

続いて、作品論に力点が置かれたものを紹介する。全体を見通して、「世を捨てた人々の多くが自然に向かつていくのに、彼ひとり人間に向かつて人間の色々な面を見いだそうとしている。私は、各段を読んで、ある段ではなつかしさのようなものを感じ、ある段では人間の哀れさを感じ、またある段ではおもわず笑いがこみ上げるようなおかしさに接し、更にある段では身のひきしまるような思いを覚えるといったように、それぞれの段から受ける感銘がきわめて多様であることに気づいた。しかも、同じなつかしさ、哀れさ、おかしさといっても、それぞれの場合で違った感じを受けた。」(女)と記した者や、「どの段においても無常観は感じられませんが、私の好きな段は、無常観を感じさせるものではあるが世の中の状況を悲しみ嘆きそれが感傷的に表わされているもの。そして嫌いな段は、無常観が感傷性から脱して無常こそ現実の姿なのだと冷たく私に迫ってくるものです。」(女)と、いわゆる詠嘆的無常観から自覚的無常観への章段間の推移をつかみとっている者もいる。

作品のとらえ方については、「人間に向かつて訴えている文学」

(女)「いつの世にも共通する人間の弱い面や、陥りやすい面などを鋭くとらえて読者に教えさすと、そんな威厳のある、一種の人生論」(女)「仏教的思想に基づいて作者兼好が持ちあわせの鋭い観察力と豊かな語学力にものを言わせて多角的に描いた『理想の人間像』を一冊に集約した物」(男)「年をとり常識的なことについて頭に入らずなり入っていることを、とても適切な例で印象深く書き表している。」(女)「作品は兼好自身ではない。彼が日常の生活体験から抜き出したものであり、それは言葉である。」(男)など、さまざま

な考えを示している。

また、作品評価としては、ほとんどの者が、「この作者のいう無常観は、時代を越えて現代の我々にも通ずるものがある。そう考えると、この『徒然草』は並の随筆ではなく、いわば、『思想の教科書』のようだと思えてくる。いずれにしても、鎌倉時代の思想が現代において理解され何かを教えるというのは、兼好という人の考え方の客観性がすばらしいからだと思われ、すごいという感じを通り越して恐いという感じさえ覚える。」(男)「六百年前の日本は今とは全く違った社会のしくみをもつ時代である。そんな中に生きている兼好の考えは、長い間多くの人々の生き方に影響を与えたであろうが、それは民主主義の世になった現代に生きる僕らにさえ古くささを感じさせない。そればかりでなく、それぞれの段において必ずなるほどと感心させられることがある。兼好の命は肉体が減んだ後もずっと人類の続く限り人類と共に生き続けていくような気がする。」(男)というように、その価値を高く認めているのであるが、「この作品から僕達は何を学ぶかという点、内容からは何も心をつものが出てこないと思います。今日では、仏教は管理化社会において社会生活の表面に出ていることはありえません。また、人間の心の底に流れているものが仏教だと言っても、今の時代はそれをすら否定します。鎌倉時代にでも戻ってその当時の生活にふれてこそ『徒然草』の内容を理解できるものと思います。」(男)のように、否定的にとらえる者もいる。

章段間の矛盾についてふれた者も多いが、そうした点を踏まえて批判の目を向ける者も、矛盾が存在する原因について考えを巡らせて

肯定する者とに分かれる。後者の意見としては、「各章段に表われている兼好の心境に違いがみられる。(中略)これは何がもたらしたのであるか。日々の多種多様な変化がもたらしたものでしょうか。だとしたら、兼好はより我々と同種の人間に近くなるようだ。」(男)「僕は学習前は、何か一本すじの通った道理を集めたような徒然草を期待したが、これはまちがいだった。(中略)ある時には仏道をすすめ、一方では女色をすすめる。―何の約束もなく書きつけた文章に現われたのは、人間吉田兼好にほかならぬと思う。」(男)「しかし、そのような矛盾があるからこそ、いかに兼好が世の中でありさまに愛着と関心を寄せているかがわかる。」(女)といったものがある。

更に、作品を通してその人間理解・人生認識の深さに触れ、人間の追求、自己の将来・人生への洞察、自己確立の欲求について語っている者も多い。「いずれにしても読むうち自分のこれからの生き方を考えずにはいられなかった。今、毎日何を何となく過ごしているのはまちがいない。若いことにまかせて、私たちは時間の有限なことを忘れている。するべきことをなくしている。いろいろなことにぶつかって精神的にもっと大きくなるうと思う。そして、一日一日を真剣に生きられたら、することなんでも一生懸命できたら、と思う。そのためにも、自分自身の欠点をもっとみつめなければならぬ。」(女)「人間の本質は決して時代や社会に左右されるものではないと感じた。武者小路実篤の『馬鹿』という作品がある。その中で馬鹿が『生きてる内に有名になるより、千年後に世界一の人間になる方を僕は望んでいる』という所があるが、兼好の事を

考えて初めてこの文の意味が理解できたように思う。今僕たちがどれほど頑張って勉強しておとなになってから出世したところで、その栄光は自分だけのもので、長くても百年も続くことはない。それを考えると、何のために自分は生きているのかわからなくなることがある。」(男)などである。

この他に、作品自体のもつ成長の可能性に触れて、「歳を経てだんだん人生というものがわかってきたら、それにつれてまた徒然草の読み味も変わっていくような気がする。」(女)「人生経験も知識も何もかも乏しい私にとって当代随一の教養人といわれた兼好法師の思想にリアリティが感じられなかったのだ。所詮は六百年以上も前の話だと簡単に片づけてしまったのだが、もし十年、何十年先に、私がおとなになった時にまた違った感じ方ができるかもしれないなと思った。」(女)と記している者もいる。

以上のように、興味内容や作品の読み取りの姿勢や内容把握の程度に質的差違が認められるものの、ほとんどの者が本気になって教材と接し、そこからつかみとり考えたものを率直に表わしている。これらの感想文から、この教材が、学習者と古典作品との間に存在するさまざまなずれを克服し、創造された価値の世界を直観的に把握し批判的に摂取させることができる力を持ち、古典との間の乖離の取り戻しを十分可能にし得る力を持っているという感を深めることができた。

学習者により大きな興味・関心をもって迎えられるという適応性の面や、そこからさまざまな問題意識を喚び醒ますという国語教育的機能の面からみても、人格形成・人間形成において重要な時期に

ある高校生に与える教材として、この『徒然草』がもつ意義・価値は非常に大きいと思われる。

四 おわりに

現代高校生が、古典文学として『徒然草』作品をどうとらえているか明らかにしたいという当初の目的からは、なお程遠い結果になってしまったと反省される。アンケートの質問事項の不備や、調査結果・読後感想文の分析・考察が一面的なものに終わっていることなど、残された問題も多い。

『徒然草』という文学作品を、そして各章段を、どうとらえどう指導していくかという問題は、常に問い正していかなければならぬ問題であるが、今後、これらの調査結果や感想文に綴られたものを踏まえて、実践に役立てていきたいと思う。そして、今回のこの報告を良い反省材料にし、踏み台としながら、試行錯誤の繰り返しの中で、古典学習指導のあり方をさまざまに問うていきたいとの決意を新たにしている。

(兵庫県立相生高等学校教諭)